

論文

## M. コンデの『移り住む心たち』における「乳白化願望」とハイブリッド

大野 藍 梨\*

## はじめに

グアドループ出身の作家、マリーズ・コンデの『移り住む心たち』*La migration des cœurs* (1995) は、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』*Wuthering Heights* (1847) に対するオマージュとして書かれた作品である。『移り住む心たち』の献辞は、エミリー・ブロンテ宛であり、作品の冒頭に「エミリー・ブロンテへ。彼女の傑作に対する私の解釈が受け入れられることを願って。信義と敬意をこめて捧ぐ<sup>1</sup>」と書かれている。コンデは、作品の舞台を、原作の、19世紀の荒涼としたイングランドのヨークシャー地方から、20世紀はじめのカリブ海地域に移し替える。本稿では、作品の舞台をカリブ海へ移し替えることで、物語はどのように変化したのかについて分析を行う。

『移り住む心たち』には、フランツ・ファノンがマヨット・カペシアの『わたしはマルチニック女』*Je suis martiniquaise* (1948) を引き合いにして「乳白化 lactification」と呼んで糾弾した自らの血統を白くしたいという欲望が描かれている。本稿では、ファノンがカペシアの『わたしはマルチニック女』をどのように読み、批判したか簡単に説明した上で、『移り住む心たち』にはどのような「乳白化願望 complexe de lactification」が描かれ、それがカリブ海世界でどのような意味を持つのか考察する。

『移り住む心たち』の先行研究において、「乳白化願望」は既に指摘されている。元木淳子は、『移り住む心たち』が「フランツ・ファノンの言う『乳白化 lactification に傾いた社会』を描いている」と指摘し、大辻都は、『移り住む心たち』における女主人公のカティが「ファノンが『乳白化願望』の名で糾弾したカリブ海の女性作家カペシアのコンプレックスをまさに体現した人物として描かれていると述べている。しかしその際、カペシアを非難した、フランツ・ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』*Peau noire, masques blancs* (1952) が参照されることはあっても、ファノンによって非難された『わたしはマルチニック女』は参照されていない<sup>2</sup>。本稿では、ファノンが批判した「乳白化願望」とはいかなるものか明らかにするべく、適宜カペシアの『わたしはマルチニック女』とファノンの『黒い皮膚・白い仮面』の本文を紹介しつつ、コンデの『移り住む心たち』における「乳白化願望」と女性を犠牲に生じたハイブリッドについて読み解きたい。

本稿では、「乳白化願望」が『移り住む心たち』においてもみられることを分析する。また、ファノンの「乳白化願望批判」が、異性愛主義・男性中心主義にもとづくものであり、批判を向けられるべきは植民地体制そのものであって、「乳白化願望」を抱く女性たちに向けられるべきではないという指摘が女性の側からされてきことを明らかにする。そして、『移り住む心たち』には「乳白化願望」だけでは説明のつかない、性的な欲望やインターレイシャル・セックス、同性愛的関係が描かれていることを指摘する。

---

キーワード：マリーズ・コンデ、マヨット・カペシア、乳白化願望、ハイブリッド、セクシャリティ

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 共生領域

## 第1節 原作『嵐が丘』から『移り住む心たち』へ

本節では、『移り住む心たち』における乳白化願望とハイブリッドについて詳述する前提として、コンデがブロンテの原作からどのように改変し、『移り住む心たち』を書いたのか整理する。

原作と『移り住む心たち』は、幼馴染で最愛のキャサリン（原作）／カティ（『移り住む心たち』）と結婚できなかった、拾われ子であるヒースクリフ／ラズィエが、その腹いせに復讐をするという大筋は共通している。しかし、原作と『移り住む心たち』は、プロットの展開の仕方が異なるほか、主要登場人物の人種の設定や職業においても違いがみられる。

原作では、嵐が丘とスラッシュクロス邸の両方で女中として仕えてきたエレン・ディーンが、スラッシュクロス邸の借主である、よそ者のロックウッドに対して、回想という形でアーンショウ家とリントン家の歴史を語る。エレン・ディーンは、物語の主要な場面に遭遇しているほか、キャサリンやヒースクリフの想いを打ち明けられる唯一の人物である。それゆえ物語は、エレンの独占的な語りによって紹介される。

『移り住む心たち』でも、エレン・ディーンに相当する女中のネリー・ラボテールが登場し、カティやラズィエについて、船のなかで話を聞きたがる女たちに話を聞かせてやるものの、ネリーが回想として話す箇所は、この小説の一部だけであり、エレン・ディーンほど語りを独占することはない。ネリーの場合、カティとエムリック・ド・ランスイユが結婚し、ド・ランスイユ家に嫁入りするときに厄介払いされたので、カティとエムリックの結婚以降については何も知らないのである。『移り住む心たち』では、地としてのコンデの描写に加えて、人種や性別、職業の異なる登場人物たちの、持ち回りのような「告白」によって物語の展開が読者に知らされる構造になっている。

次に持ち回りのような告白を行う登場人物の人種の設定について検討する。原作では、ミスター・アーンショウ（ヒンドリー、キャサリン兄妹の父親）が、彼の子どもが幼い時に、遠出した際に、リバプールで孤児を拾ってきたのがヒースクリフであるという設定になっている。「悪魔のところからやってきたように色が黒い<sup>3</sup>」、「ジプシーのような子<sup>4</sup>」と描写されているものの、何人の血をひいているのか分からない。『嵐が丘』研究においてはアイルランド人ではないかとされてきたが<sup>5</sup>、ポストコロニアル研究においては「リバプールで拾われてきた」、「肌の色が黒い」という設定から、ヒースクリフの出自に、当時イギリスが交易していた新大陸を見出そうとしている<sup>6</sup>。

他方、『移り住む心たち』では、ジュスタンとカティ兄妹は、混血で、ラズィエの外見は、ネリー・ラボテールによると、「黒人かインド人と黒人の混血<sup>7</sup>」だとされている。ジュスタンとカティは二人とも白人と結婚するほか、『移り住む心たち』には、女中や漁師として黒人やインド人が登場し、彼らは時にプロットの語り手にもなる。

コンデは、舞台を20世紀初めのカリブ海へと移し、登場人物に人種を設定し、彼らに語らせた。『移り住む心たち』においてどのようなセクシャリティが描写されているのかについて次節以降分析する。

## 第2節 「乳白化願望」と上昇志向

本節では、まず、フランツ・ファノンが『黒い皮膚・白い仮面』の中で糾弾した、マヨット・カペシアの『わたしはマルチニック女』を参照し、ファノンが批判した「乳白化願望」とはいかなるものか明らかにする。また、『移り住む心たち』の登場人物に見られる「乳白化願望」について、ジュスタン、カティ、ラズィエのケースをそれぞれ分析する。

### マヨット・カペシアの『わたしはマルチニック女』における「乳白化願望」

前述したとおり、先行研究においては『移り住む心たち』において、「乳白化願望」がみられるという指摘がなされているが、そもそも「乳白化願望」とは何なのか。「乳白化願望」という言葉の生成過程をふりかえってみたい。

『わたしはマルチニック女』の作者であるマヨット・カペシアの本名は、リュセット・セラナス・コンバットであり、1916年マルチニックのカルベ村に生まれる。母は織維やタバコを作る百姓をしていて、父親とは正式に結婚しておらず、父は別の家庭を持っていた<sup>8</sup>。『わたしはマルチニック女』では思春期に母親が亡くなって以来、彼女は「シンデレラ」のように働かされ、洗濯屋を始めると、その事業に成功し父親からの経済的独立を果たす<sup>9</sup>。

リュセットは17歳の時に、白人ベケと愛人関係をもった後、ヴィシー政権時に白人将校と愛人関係になる。そして1946年にフランス本土に渡り、1948年に彼女の自伝的小説『わたしはマルチニック女』を出版する<sup>10</sup>。『わたしはマルチニック女』は、有色のマヨットが小学生時代の年長の遊び相手である洗濯女のルーズにあこがれ、自分も洗濯女になり、ヴィシー政権時の白人将校のアンドレに恋をする話である。マヨットは、幼いころから自分が「ニグロ扱い」されると、激しい罵倒で反撃する一方、白人の祖先がいると思われる人に出くわすと、魅了されてしまう。

フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』のなかで、マヨット・カペシアの『わたしはマルチニック女』を引き合いに出し、白人の男性を求め、自らの社会的上昇と、子孫の血統をより白くしたいという心性を「乳白化 lactification」と呼んでいる<sup>11</sup>。

『黒い皮膚・白い仮面』はポストコロニアル研究、精神分析学の権威として長らく評価されてきたが、その異性愛主義や性差別主義については看過されてきた。カペシアの『わたしはマルチニック女』が、フェミニストたちからは、アンティルの黒人女性の視点からロマンスを描いたと評価されたのに対して、黒人男性からは、カペシアがヴィシー政権時の将校と交際することに対して非難された。ファノンもまた、カペシアが白人男性へと交際することを「彼女の人種に対する不貞」として激しく非難している<sup>12</sup>。

ここで、カペシアが「白人らしい容貌」に魅了される様子について『わたしはマルチニック女』から引用したい。

彼女の父は黒人で、彼女の母は混血だったが、彼女は皆と同じように乳のように白い肌であり、どんなに焼けつくような太陽によっても損なわれることのない白さと、髪は縮れていたが、ブロンドで、青い目をしていた<sup>13</sup>。

これは、マヨットのクラスメートに関する記述である。白い肌、ブロンドの髪、青い目に彼女自身が価値を置いていることがうかがえる。友人の洗濯女ルーズについては、次のように記述している。

彼女の肌は金色で、オレンジやバナナみたいな色で、長い黒髪は三つ編みに結って、縮れているのは付け根だけで、鼻はべしゃんこで、唇は分厚く、しかし、顔つきは彼女の近い先祖に白人がいるようであった<sup>14</sup>。

この描写からも、白人らしさが美を体現しており、黒人らしい容貌が醜いとマヨットが考えていることがわかる。マヨットが白人将校であるアンドレを愛するのも、彼の白人らしい容貌に魅了されたからである。この点について、フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』の中で、カペシアを次のように批判している。

『わたしはマルチニック娘』は有害な行動を説く、安直な作品である。マヨットは白人の男を愛しており、彼のすべてを受け入れる。彼は殿様だ。彼女は何も求めず、何も要求しない。幾分かの白さを自分の生に求める以外には。…『わたしは、あの人を愛していた、なぜなら、青い眼と、ブロンドの髪のと、青白い顔色をしていたから。』…マヨットが目指すのは、乳白化 (lactification) なのである。なぜなら、結局のところ、血統を白くしなければならぬのだから。このことをマルチニックの女はすべて知っており、口にし、繰り返し語っている。血統を白くすること、血統を救い出すこと<sup>15</sup>。

ルーズら洗濯女は、「仕事が終わると、若い女たちは人目も気にせず川で水浴びをした。そうすると自然とこうしてあたりをうろつく男たちの気を惹きつけた<sup>16</sup>」という。マヨットが洗濯女になった理由は、身近な年長の友人のルーズが洗濯女であったからであるが、ファノンに言わせると、洗濯女になるのは乳白化願望のあらわれであるという<sup>17</sup>。

『彼女は引き出しからインク壺を取り出して、彼の頭の上にインクのシャワーを浴びせるのだった。』これは彼女なりのやり方だった。しかし彼女は、早くから、この努力の空しさに気がついた。やがてルーズと母親とが現れ、黒人の女の一生はきびしいものであることを彼女に説いて聞かせた。そこで、もう世界を黒くするこ

とも、ニグロの世界にすることもできないので、彼女は身体と思考において、世界を白くしようと努めることになる。まず彼女は洗濯屋となるのだ<sup>18</sup>。

マルチニックで行われていた洗濯の仕方についてカベシアは次のように記述している。

マルチニックの洗濯はフランス本土とは様子が違った。私たちのところでは、布を煮沸する必要がなどなく、太陽が全部役割を果たしてくれた。白くし、よい香りをつけるために、女たちは木炭やオレンジの皮を入れたぬるま湯につけた<sup>19</sup>。

このようにファノンのいう「乳白化」とは、白人の男性を通じて自らの血統を白くし、社会的上昇を目指すことを意味している。だが、これに対して、ベルグナーは、ファノンの固定されたジェンダーカテゴリー（異性愛主義）と、カベシアを含む女性を、もっぱら男性と性交渉する存在の身に矮小化させていると批判している<sup>20</sup>。そして『移り住む心たち』の作者であるコンデもまた、アンティルの女たちがもつ「乳白化願望」を認め、ファノンによって非難されたカベシアを擁護している。

当時、黒人の男は奴隷貿易と抑圧に苦しめられ、一人前の大人としてではなく子ども扱いされ、去勢され、男らしさを否定されていました。これに対して、白人の主人の側は威光に包まれ、権力と富とあらゆる肯定的な価値を体現していたのです。したがって、白人男性に対して欲望を感じるマイヨット個人の疎外を断罪することには、意味がありません。むしろ、そのような疎外を生み出した植民地体制そのものを撃つべきです<sup>21</sup>。

『移り住む心たち』におけるラズィエもまた、本人の語りによると、キューバで洗濯屋をしていたという。カベシアの『わたしはマルチニック女』でみた「乳白化願望」が『移り住む心たち』では、どのように「乳白化願望」が描写されているのかみてみよう。

#### ヒンドリー／ジュスタンの場合

原作の女主人公キャサリンの兄であるヒンドリーは、横暴で意地悪な性格で、父親からも「ヒンドリーは役立たずじゃ。どこぞ[大学]へ行ったところでうまくいきやしない<sup>22</sup>」と言われてしまうほど良いところがない。父親のいないところで、ヒースクリフをいじめたりもする。「名もなく財産もない女」である病弱なフランシスと結婚し、妻のフランシスが亡くなってからは酒におぼれ、賭博にあけくれる自堕落な生活を送り、ヒースクリフに財産を全部巻き上げられてしまう。

『移り住む心たち』の女主人公カティの兄であるジュスタンは、教育に関心のなかった父とは異なり、自ら進んで学校に行き、教養を身に付くけようとする。そして、白人ベケの中でも良家の娘であるマリー＝フランスと結婚する。マリー＝フランスの両親は、彼女が病弱で長くは生きられないと分かっていたので、わずかな喜びを与えるべく、混血のジュスタンとの結婚を許したのだが、そうとは知らないジュスタンはこの結婚に舞い上がる。混血であるジュスタンは、教育を受け、白人ベケのなかでも良家の娘を娶ることで、自らの社会的立場の上昇を目指したのである。

その象徴がジュスタンとマリー＝フランスの結婚式である。肌が白く、ブロンドの髪をした彼女の美しさを鳥じゅうの者に見せびらかすかのように、金に糸目をつけず、盛大な結婚式を挙げる。白人で資産家であるヒンドリーとは異なり、ジュスタンは、混血というコンプレックスを解消する手段として、教養を身につけ、良家の白人娘と結婚をする必要があったのである。

#### キャサリン／カティの場合

原作の女主人公キャサリンは、エドガー・リントンにプロポーズされるとすぐに、彼のプロポーズに承諾したことをネリーに打ち明ける。ハンサムで若く、陽気で、お金持ち、そして彼女を愛してくれているから結婚を承諾するのだとキャサリンはネリーに言い放ち、その決断自体に迷いはない。しかし、ヒースクリフのことも愛しているキャ

サリンは、次のようにネリーに告白する。

向こうにいる意地の悪い男 [ヒンドリー] が、ヒースクリフをあんな低い身分にしなければ、結婚を考えたりしなかった。ヒースクリフと結婚することは、私を没落させることになるし、だから彼は私が彼をどんなに愛しているのか知らないの。ネリー、私が彼を愛しているのは、彼がハンサムだからではなくて、彼は私以上に私自身だからなの。魂が何でできていようとも、彼の [魂] と私の [魂] は同じで、リントンのものとは、月光と稲妻、霜と火くらい違うの<sup>23</sup>。

この告白に遭遇したヒースクリフは、この後行方をくらませてしまう。キャサリンがヒースクリフと結婚をためらう理由は、「自分も没落してしまう」からに他ならない。『移り住む心たち』でも、カティはエムリック・ド・ランスイユからのプロポーズをネリーに打ち明ける。自分の中に二人のカティがいるという彼女は、自らの混血という血を象徴するような告白をする。

私は小さなときからいつも私の中に二人のカティがいるみたいなの。一人目のカティはあらゆる全ての悪行と共に、たった今アフリカから下船しているの。もう一人のカティは、白人の祖先の肖像画のように、純粹で、信心深く、秩序と節度を愛しているの。でも、二番目のカティはいつも黙っていて、一番目の方がいつも表にでていての<sup>24</sup>。

ネリーは、カティにエムリックと結婚すれば何でも手に入れられるとけしかけるが、カティは、「わたしのこどもたちは白人の金持ちになれる」からエムリックと結婚するのだと言う。原作と同様、カティがラズィエと結婚できないのは、自分も没落してしまうからである。

もしジュスタンがラズィエをあんなふうにしなかったら、その結婚を考えたりしなかった。でも、今のラズィエの状態では、私は彼とは絶対結婚できない。没落するのよ。奴隷船から降りてきた無信仰な奴らの末裔のカティとして。彼と一緒になれば、アフリカの野蛮人のように生き直さなくてはならなくなる。それじゃおなじよ<sup>25</sup>。

原作のキャサリンと『移り住む心たち』のカティが結婚相手を条件で選び、ヒースクリフ／ラズィエと結婚して没落したくないと考えている発言は非常に似通っている。しかし、混血であるカティがエムリックを結婚相手に選ぶ最大の理由は、自分のこどもたちが白人の金持ちになれるからなのである。兄のジュスタン同様、白人と結婚することで、フランツ・ファノンが『黒い皮膚・白い仮面』で指摘しているように、子孫の血を「乳白化」させようとしていることが読み取れる。元木淳子は、原作が肌の色がキャサリンの結婚の決定的な要因ではないのに対して、コンデの作品では「身分が肌の色で決められる悲しい社会」を描いていると指摘している<sup>26</sup>。

原作では、ヒースクリフの肌の色が問題にならないのに対して、コンデが舞台をカリブ海へと移し、登場人物にそれぞれ人種を設定したことで、結婚に際し、その血筋が重要視されることになったのである。

### ヒースクリフ／ラズィエの場合

キャサリンがエドガーのプロポーズを受けたことや、キャサリンが自分に対する愛をネリーに打ち明けている所に遭遇し、ヒースクリフは、しばらく行方をくらませてしまう。再び戻ってきたときには大金を手にはしているものの、どのようにして大金を得たのかは描かれていない。ヒースクリフは、キャサリンと結婚できなかった腹いせに復讐を企て、キャサリンの実家であるアーンショー家とキャサリンの嫁ぎ先であるリントン家の財産を獲得していく。ヒースクリフは、キャサリンがエドガーとつきあい始めた時に、ネリーに自分の気持ちをもらす。

でも、ネリー、あいつ [エドガー] を 20 発殴り倒したところで、あいつが見苦しくなって俺がましになるわけじゃ

ない。明るい色の髪の毛と色白の肌をして着飾ってふるまって、あいつと同じくらい金持ちになるチャンスがあればなあ<sup>27</sup>。

やっぱり、エドガー・リントンみたいな大きくて青い目の顔になりたい。そう願ってもなれないけど<sup>28</sup>。

ヒースクリフ自身もがらしているように、自分の見た目をどうにもすることができず、最愛のキャサリンと結婚できなかった彼には、財産を奪っていくことくらいしかできないのである。しかし、どんなに財産を獲得してもヒースクリフは幸せになれず、キャサリンの亡き後、彼女の幻をみることだけに執着する。

『移り住む心たち』のラズィエも、カティがエムリックと交際を始めた時に、次のようにもらす。

ああ、俺が白人だったら。白い肌と青い両目！白い肌とブロンドの髪！俺が白人だったら、世間は（それだけで）俺を尊敬するさ。ジュスタンも他の奴らもな<sup>29</sup>。

ヒースクリフ同様、ラズィエも自分の黒い肌の色を恨むのである。原作と異なるのは、カティと結婚できなかったラズィエは、グアドループの白人ベケに対抗する社会主義運動家になることである。カティの結婚相手や実家から財産を奪うことには変わりはないが、ラズィエは社会主義運動のリーダーとしその略奪行為を正当化し、自身の尊厳を保とうとするのである。自らの肌の色は、変えることはできないが、社会主義運動のリーダーとして白人ベケであるエムリックに対峙しようとする。

カリブ海地域の人口のほとんどが黒人で構成されているにも関わらず、その社会を牛耳っているのは一握りの白人ベケである。白人に近づくこと、「乳白化」は、社会的上昇のチャンスであり、そのためこれまでみてきたジュスタン、カティ、ラズィエは異様ともいえるほど肌の色に固執している。あたかも「白人であること」、「白いこと」が正しいかのような観念にとらわれている。前述したように、ファノン、マヨット・カベシアの職業である洗濯屋が、乳白化願望の象徴であると指摘しているが、コンデは自分の肌の色の黒さに悩んでいた、男であるラズィエにキューバでカベシアと同じ洗濯屋をさせる。これは、ラズィエの持つ乳白化願望に対するオブセッションを描いているといえよう。

このように本章では、『移り住む心たち』において、「乳白化願望」が描かれていることをしてきたが、『移り住む心たち』には、「乳白化願望」だけでは説明のつかないセクシャリティ表象がなされている。次章では『移り住む心たち』に描かれている様々なセクシャリティ表象を読み解きたい。

### 第3節 原作と『移り住む心たち』におけるセクシャリティ

『移り住む心たち』における多様なセクシャリティについて詳述するために、まず、原作ではどのようなセクシャリティの描写がなされているか検討する。本節ではラズィエの性的魅力について、カティとの関係について、また、女同士の同性愛的関係について分析する。そして、カリブ海におけるハイブリッドが、これまで数多くの女性を犠牲にして生じたことを論じる。

#### 原作『嵐が丘』について

原作の『嵐が丘』は、ヴィクトリア朝に書かれたこともあって、まったく性的な描写はなく、登場人物の男女の間に子どもが生まれて初めて、その二人の間に肉関係があったことが読者に知らされる。語り部であるネリーも、登場人物たちの性的退廃を疑うような人物でもない。

最愛のキャサリンと結婚できなかったヒースクリフは、キャサリンの義理の妹にあたるイザベラから好意を寄せられる。ヒースクリフは、イザベラをたぶらかし、二人は駆け落ち結婚する。しかし、ヒースクリフが愛しているのはキャサリンだけで、イザベラを言葉と暴力によって虐待する。ヒースクリフのイザベラに対する虐待と憎悪はすさまじいが、彼女を「性的に」虐待したかどうかについては不明である。しかし、イザベラとの間に息子リント

ンが生まれることから、この夫婦間に肉体関係があったことが分かる。

キャサリンの娘キャシーとリントンは、ヒースクリフによって交際・結婚するよう仕向けられるが、本と一緒に読んだり、手紙のやりとりをしたりするだけであり、リントンが病弱なこともあって、ヒースクリフがやきもきするほど関係が進展しない。

ヒースクリフのキャサリンに対する異常なまでの執着から、キャサリンの幻影を見ようとしたり、夫婦でないにも関わらずキャサリンと同じ墓に入ろうとしたりする<sup>30</sup>。原作『嵐が丘』では、性的描写が一切されないまま、ヒースクリフのキャサリンに対する異常な愛情だけが強調されている。

### ラズィエの性的魅力

ブロンテが作品中に性的描写を一切していないのに対して、コンデは自然な性描写をところどころに取り入れている。そのなかでも、ラズィエは性的魅力に富んだ人物として描かれている。

ユベール（ジュスタンとカティの父）が藪のなかで拾ってきたラズィエは、素っ裸の、薄汚い7、8歳の子どもであるにも関わらず、「性器だけはいっばしの形をしてい」た<sup>31</sup>と、ネリーは後に初めて会った時のラズィエについて語っている。

カティの結婚後グアドループを去っていた間、キューバで、金持ちの農園主の未亡人であるステファニア・フォンセカ夫人と愛人関係にあったラズィエは、彼女に2度中絶をさせたと書かれている。また、ラズィエのために、夫人が他の男を拒んでいたことから、ラズィエが性的魅力に富んでいたと想像できる。またグアドループを馬鹿にする夫人に対し、「あんたのような肌の人間は、身体の中に情熱を持っていないんだ。海の向こう側で、息をして、食って、他の男の隣で眠る人を想像して、火のようにじりじりすることを知らないんだ<sup>32</sup>」とやり返す。自分を含めたグアドループの有色人種が「情熱的」であると言おうとしているのである。

キューバからグアドループへ帰る船の中でも、ラズィエの黒人男としての性的な魅力によって、同じ船の乗客の女性たちをうっとりさせたという描写がある。

ヒースクリフが妻のイザベラとの間に一人しか子どもをもうけなかったのに対して、ラズィエは妻のイルミーヌとの間に7、8人の子どもを作る。愛情の冷めきった妻イルミーヌと子どもを作る一方で、家庭の外ではモナという娼婦と十年來の愛人関係にある。モナがムラートの代議士やラズィエの息子であるブルミエ＝ネが肉体関係を持ったときに激昂するが、愛情ゆえではなく、独占欲の延長のようにみえる。というのも、ラズィエもまたヒースクリフと同様、カティの幻を見ることだけに人生に重きを置いているからである。お金があるにも関わらず、妻のイルミーヌや子どもたちに裕福な暮らしをさせることを許さず、愛人のモナにも最低限の「代金」しか支払おうとしない。その一方で、カティの幻を見るために、何人もの呪術師を訪れ、彼らに支払う代金には糸目をつけないことから、カティへの執着ぶりがうかがえる。

### カティとラズィエの関係

カティとラズィエは、ラズィエが拾われてきて以来、同じベッドで眠るなど、肉体的な接触が日常的にあり、周囲の発言からはふたりの間に性的な関係があったと読者に印象付けられる。

兄のジュスタンは、親密すぎるカティとラズィエに向かって「何をしてるんだ！おまえ、何がしたいんだ？ツケで腹を売るのはか？そのうえ黒人に<sup>33</sup>！」と罵倒する。年頃になって兄のジュスタンに別々に眠るように言われてからも、カティは夜になると、ラズィエのところへもぐりこみに行く。カティとエムリックの初夜でシーツは赤く染まらない。コンデは、カティとラズィエが性的な関係を持っていることを読者に匂わせつつも、はっきりとした二人の性描写をしていない。

エムリックはボルドーに留学しているときに、いとこのデオダに肛門性交を迫られてから、性的なトラウマを抱えることになる。また、カティが処女でなく、「ラズィエの食い残し<sup>34</sup>」だと分かっているが、彼女とは円満な夫婦関係を築き、三年間の間にデオダとイジドルという金髪の子どもの男の子をもうける。

しかし、ラズィエがグアドループに戻ってきてからカティが身ごもった子どもの父親は、エムリックなのかラズィエなのかはカティ以外誰も知りえない。その身ごもった子どもは後にカティ2世と名付けられるが、肌の色は黒く、

父親がラズリエであることを暗示している。

この小説において、ラズリエが性的に魅力に富んだ、マッチョな男として描かれているのに対して、エムリックはベッドのなかでは「ふぬけ」で「同性愛者」のレッテルを貼られた男としてコンデは描いている。より卑近な表現を使うと、カティをラズリエに易々と寝とられてしまう印象を読者に与えている。ブロンテがキャサリンとヒースクリフの関係を、プラトニック・ラブとして描き、不倫を想像させないような書き方をしている一方で、コンデはカティとラズリエの間に肉体関係があり、カティ2世の肌の色を暗くすることで、その父親がラズリエであると思わせるように描いている。カティとラズリエの間に肉体関係があることを暗示させることによって、ブロンテのプラトニック・ラブを暴いたのだといえる。

### 女同士の同性愛的関係

コンデはこの作品中において、女性同士の同性愛を想像させるシーンを描いている。エムリックとの結婚に際して、ネリー・ラボテールをお払い箱にして、カティのためにあてがわれた女中のリュシンドは、毎日のカティの世話をすることで、エムリックがカティを性的に満足させていないことを見抜く。リュシンドにとって、カティは「女主人であったが、私の愛人であり、私の子どもでもある、私自身が（彼女に）なりたい<sup>35</sup>」存在であった。沐浴を手伝うときにリュシンドはカティの身体を愛撫する。

夜、寝る前に、彼女を入浴させてやりました。香りのついた水を、肩や、黒人の血の印である茄子色の乳首をした大きな乳房、胎のひだまで流してやりました。彼女は股を開いて、私の手は彼女の身体の最も秘めた所まで届かせました<sup>36</sup>。

大辻都は、カティとリュシンドの関係は、親しいものの、関係は対等ではなく、「ルサンダからカティへの一方的なサービス」であり、「乳母と女主人との関係から濃密に性的な気配が生起しているのも否定できない」と指摘している<sup>37</sup>。エムリックとの性生活に満足できないカティを乳母であるリュシンドが満足させようとしていたと解釈することもできる。このような女同士の同性愛的な関係は、先に引用した女であるゆえの苦しみを分かち合い、克服する可能性を見いだすことができる。大辻は次のように述べている。

黒い肌をくまなくたどる（たどられる）行為の場では、使用人と女主人との関係を越えた強烈な連帯感と官能の拮抗が維持されている。連帯感が官能を生み、官能が連帯感となる。入浴の場は、男女の性行為のような完結性を持たないゆえの、いっそう持続力のある官能的連帯が可能となっているとも見えてくる<sup>38</sup>。

つまり、コンデは女同士の関係を、男女の間では与えられることのできない、肉体的・精神的充足をしあうものとして描いているのである。

### ハイブリッドと女たちの苦悩

この小説のなかの語り部たちは、アフリカやインドに起源をもち、その祖先が強姦され、強姦の結果としてみずからが誕生したのだと告白する。混血の女主人公カティは、エムリックとの結婚により乳白化願望を果たすが、それと引きかえに自由を失う。カティの結婚後、コンデは地の文で次のようにカティの結婚について描写している。

クリスタルのシャンデリアの下で、祖先の何世代もの奴隷たちが磨いてきた床の上で、カティはエムリックと一緒に踊った。流れる音楽はまるでレクイエムのような感じだった。バル＝フィユのご領地では、黒人も混血も白人も、女のため息と苦痛で満ちていて、従属を強いられている点で同じだった。残忍な農園主に強姦された奴隷たち。宴の席でライバルに毒を盛られて死んだ混血女たち。わずかな金と土地と引き替えに、年寄りに売られた処女たち。兄弟から身体を渴望された姉妹たち。息子から求められた母たち。…カティは長い犠牲者の列の中に自ら加わったのだと分かった<sup>39</sup>。

カティの面影を残した、カティの甥ジュスタン＝マリ（兄のジュスタンと兄嫁のマリー＝フランスの間の子ども）は、病弱ながらも、インド系の娘エティエーズと、暴力的な性行為に及び、その結果、ジュスタン＝マリは死亡する。この章は、コンデの地の文によって物語が進行し、この章のタイトルは「野蛮な婚礼」と名付けられている<sup>40</sup>。

第2節では「乳白化願望」について分析したが、コンデはジュスタン＝マリとエティエーズの性行為を描くことで、奴隷制以来アンティルにありながらも語られてこなかった「乳白化願望」だけでは説明できない男性の欲望やインターレイシャル・セックスを暴いたのである。

コンデは、彼女の編著作である『クレオリテを考える』のなかで、よそ者の男たちの精子から女の腹を守ろうとする者たちによって、混血が常に社会的な脅威であることを指摘している<sup>41</sup>。このハイブリッド化、あるいはクレオール化は、黒人男性作家たちがカリブ海地域を語るタームとして肯定的に使われて久しいが、その背後には女性たちの数え切れない受難や苦悩があることは想像に難くない。石塚道子は、クレオール言説の男性中心主義を指摘し、クレオリテ生成過程に女性の犠牲があったことを述べている。

アビタシオンをクレオール言語・文化の生成空間と認めることは、支配者である白人男性奴隷主側の文化的貢献を認め、混血を肯定することである。ところで人間の混血には生物学的に捉えられる混血現象が含まれる。アビタシオンの支配者であれ奴隷主は奴隷に対して性的自己決定権を認めるほど寛容ではなかったし、むしろ彼らは女性奴隷を暴力的に性支配した。奴隷制社会での混血の多くは白人男性の性権力の行使の結果として生まれた。このような混血現象下では男性奴隷は再生産力を否定された、“去勢”された存在としての役割を割り振られる。クレオールとしてアビタシオンでの混血を受容することはこの重層的ジェンダー序列をも受容することを意味するのである。しかしクレオール言説のなかでこの序列は男性中心主義的な項目の入れ替えで変形される。つまり、女性奴隷を媒介として、白人男性に対して奴隷男性が劣位に置かれるのだから奴隷女性の存在を不可視にしてこのジェンダー対立を無化するのである<sup>42</sup>。

コンデや石塚の引用からは、カリブ海世界におけるハイブリッドの背景には、数多くの女性に対する性被害による犠牲があることが示されている。

## おわりに

これまで述べてきたことを踏まえ、コンデの『移り住む心たち』では、物語がどのように変わったと言えるのかまとめたい。『移り住む心たち』である、コンデの『移り住む心たち』は、一言でいうならカリブ海地域の社会のひずみを反映させて描かれていると言える。1848年に奴隷制が廃止されるが、「奴隷制が終わっても結局何も変わらない<sup>43</sup>」と本文中にあるように、いつまでたっても、一握りの白人ベケが牛耳る社会のままなのである。混血や黒人は、生物学的にも社会的にも白人に近づき、自らの乳白化願望を満たそうとする。一方、性的な欲求を満たすためには、カティやジュスタン＝マリがそうであったように、より肌の黒い、ないしは自身より立場の弱い男女をその対象にしようとする。その結果として、混血がすすみ、住民の肌の色にはグラデーションが生じる。

『わたしはマルチニック女』はマルチニックの小学校でのクラスメートの肌の色について次のように記している。

クラスは男女20人ほどの子どもからなり、子どもたちはアフリカ風の黒人から白人まで色んな色調の肌で、その間に黄色から、赤や、様々な茶色があった<sup>44</sup>。

本文中にある、奴隷制廃止に貢献した偉人シェルシュールが建てた工場が、グアドループの現実に即さず機能していないように、セゼールの「ネグリチュード」、グリッサンの「アンチャニテ」、シャモワゾーらの「クレオリテ」といった男性作家たちによって語られてきた理念的なタームが、実はカリブ海地域の実情からかい離しているのではないかとも思える。コンデ自身はそのような概念化を「特別扱い」だとして一定の距離をとっている<sup>45</sup>。

また、彼女はクレオール語を話さないが、フランス語で小説を書くことについて『越境するクレオール』の中で、

次のように語っている。

私が書くフランス語は、フランス本土のフランス語とはほとんど関係がありません。私の祖先が、天井から火を盗んだプロメテウスのように、フランス語を盗み、それを私に伝えたのです。その言葉を私は好きなように使っているのではないのでしょうか？ フランス語がコロニアルな言語だとすれば、私はフランス語を植民地化 (coloniser) したのではないのでしょうか<sup>46</sup>？

原作の『嵐が丘』も、翻案である『移り住む心たち』も、ヒースクリフやラズリエが最愛の女性であるキャサリンやカティと結婚できなかった腹いせの復讐劇であるわけだが、当のキャサリンやカティが結婚せざるを得なかった状況や都合については一切考慮されていない。極端な言い方をすれば、自分の想いが満たされなかった男の身勝手な暴走であるともいえる。コンデはこの作品を通じて、カリブ海地域の抱える社会の歪みや男性本位の社会を暴いているのである。原作がキャシーとヘアトンの結婚によるハッピーエンドで締めくくられるのに対し、ラズリエの息子プルミエ＝ネは娘アンチュリアを抱いて「こんなに美しい子が呪われるはずがない<sup>47</sup>」と信じようとする父親としての想いによって締めくくられている。この結末は、これ以上肌の色や男性との関係によって人生が決まってしまうような「呪われた」運命から女性が抜け出してほしいというコンデの祈りを代弁しているのではないだろうか。

## 注

- 1 Maryse Condé, *La migration des cœurs*, Robert Laffont, 1995, la dédicace, 邦訳タイトルは『風の巻く丘』 風呂本惇子・元木淳子・西井のぶ子訳、薪水社、2008年。
- 2 元木淳子「カリブの『嵐が丘』—マリーズ・コンデの『移り住む心』を読む—」(『法政大学小金井論集』、第4巻、2007年3月、85-105頁) 90頁。大辻都『渡りの文学—カリブ海のフランス語作家マリーズ・コンデを読む』法政大学出版局、2013年、286頁。
- 3 Emily Brontë, *Wuthering Heights*, Penguin Books, 2003; first published in 1847, p.36. 邦訳タイトルは『嵐が丘』。河島弘美訳、岩波文庫、2010年を適宜参照した。
- 4 *Ibid.*, p.37.
- 5 Terry Eagleton, *Heathcliff and the Great Hunger: Studies Irish Culture*, Verso, 1995, pp. 11, 22-23.
- 6 西成彦『耳の悦楽—ラフカディオ・ハーンと女たち』紀伊国屋書店、2004年、143-164頁。
- 7 Condé, *op.cit.*, p.28.
- 8 Myriam Cottias et Madeleine Dobie, *Relire Mayotte Capécia : Une femme des Antilles dans l'espace colonial français (1916-1955)*, Armard Cloin, 2012, pp.14-17.
- 9 リュセット自身は洗濯屋ではなく、お針子をしたり、食料品店、チョコレートショップ、映画館などで働いていた。齊藤みどり「捏造されたマイヨット・カベシア—ファノンそしてフェミニストたち」(秦邦夫他編『「終わり」への遡行—ポストコロニアリズムの歴史と使命』英宝社、2012年、173-194頁) 180-187頁。
- 10 『わたしはマルチニック女』 *Je suis martiniquaise* は、マヨット・カベシアをペンネームとするリュセット・セラナス・コンバットによって書かれたものではなく、当時の恋人のアンドレの草稿に編集者のブシェが手を加えたものだということがわかっている。Christiane P. Makward, *Mayotte Capécia ou l'aliénation selon Fanon*, Karthala, 1999. 齊藤、前掲書、173-194頁。
- 11 フランツ・ファノン、海老坂武・加藤晴久訳『黒い皮膚・白い仮面』、1998年、64-84頁。ファノンは、この著作の中で、非白人が白人に対して「劣等コンプレックス complexe d'infériorité」を抱いていると記しているが、「乳白化願望 complexe de lactification」という語はファノン自身使用していない。
- 12 Gwen Bergner, "Who is that Masked Woman? Or, the Role of Gender in Fanon's Black Skin, White Masks," *Proceedings of the Modern Language Association*, 110: 1, 1995, pp. 75-88, p.83.
- 13 Mayotte Capécia, *Je suis Martiniquaise in Relire Mayotte Capécia : Une femme des Antilles dans l'espace colonial français (1916-1955)*, Armard Cloin, 2012, p.61.
- 14 *Ibid.*, p.63.
- 15 ファノン、前掲書、65-70頁。

- 16 Capécia, *op.cit.*, p.62.
- 17 売春婦を除いて女が一人で自活するには洗濯女しかなかったとカベシアは述べている。Bergner, *op.cit.*, p.83.
- 18 ファノン、前掲書、68-69 頁。
- 19 Capécia, *op.cit.*, p.62.
- 20 Bergner, *op.cit.*, p.77.
- 21 マリーズ・コンデ、三浦信孝編訳『越境するクレオール——マリーズ・コンデ講演集』岩波書店、2001 年、56-57 頁。
- 22 Brontë, *op.cit.*, p. 41.
- 23 *Ibid.*, p.81.
- 24 Condé, *op.cit.*, p.48.
- 25 *Ibid.*, p.48.
- 26 元木、前掲書、90 頁。Condé, *op.cit.*, p.92.
- 27 Brontë, *op.cit.*, p.57.
- 28 *Ibid.*, p.58.
- 29 Condé, *op.cit.*, p.36.
- 30 西、前掲書、160 頁。西は、『嵐が丘』において、「ヒースクリフの孤児性、ヒースクリフのプラトニック・ラブ（及び屍体愛好趣味）が極端にまで強調されている」と指摘している。
- 31 Condé, *op.cit.*, p.28.
- 32 *Ibid.*, p.21.
- 33 *Ibid.*, p.33.
- 34 *Ibid.*, p.55.
- 35 *Ibid.*, p.76.
- 36 *Ibid.*, p.76.
- 37 大辻、前掲書、329 頁。
- 38 大辻、前掲書、331 頁。
- 39 Condé, *op.cit.*, pp.56-57.
- 40 邦訳の章のタイトルは「奔放な婚礼」。
- 41 Maryse Condé, 《Chercher nos vérités》 in *Penser la créolité*, 1995, p.309.
- 42 石塚道子「クレオールとジェンダー」（複数文化研究会編『〈複数文化〉のために——ポストコロニアリズムとクレオール性の現在』人文書院、1998 年、178-190 頁）182-183 頁。
- 43 Condé, *La migration des coeurs*, *op.cit.*, p.26.
- 44 Capécia, *op.cit.*, p.61.
- 45 Condé, 《Chercher nos vérités》 *op.cit.*, p.310.
- 46 コンデ、前掲書、37 頁。
- 47 Condé, *La migration des cœurs*, *op.cit.*, p.337.

## The Lactification Complex and Hybridization in Maryse Condé's *La migration des cœurs*

OHNO Airi

### Abstract:

Previous researches have pointed out the lactification complex seen in Maryse Condé's *La migration des cœurs*. In this paper, using the approach of comparative literature, I analyze how sexuality and hybridization are described in *La migration des cœurs*. This novel is a parody on Emily Brontë's *Wuthering Heights*; comparing the original and the parody, I show how Condé changes the setting to the Caribbean to explore the intersection of race and sexuality there. I also quote Mayotte Capécia's *Je suis martiniquaise*, which portrays a Caribbean woman searching for white men to become rich and gain high social status. In *Peau noire, masques blancs*, Franz Fanon denounces Capécia's text as exhibiting "the lactification complex" which he defines as the wish to whiten one's descendants' blood. I analyze how Condé portrays the lactification complex in *La migration des cœurs*. I mention that racial hybridization came from the rape of black women by white men in the case of the Caribbean. I demonstrate that, although skin colour or relationships with men decide the women's lives in this novel by Condé, it is her wish to release them from this condition that drove her to write the novel.

Keywords: Maryse Condé, Mayotte Capécia, lactification complex, hybridization, sexuality

### M. コンデの『移り住む心たち』における「乳白化願望」とハイブリッド

大野 藍 梨

#### 要旨:

先行研究は、M. コンデの『移り住む心たち』において「乳白化願望」がみられることを指摘している。本稿では、『移り住む心たち』においてどのようなセクシャリティ表象やハイブリッドが見られるかについて比較文学的アプローチから分析した。この作品は、E. ブロンテの『嵐が丘』の翻案であり、原作と比較し、カリブ海を舞台にすることで、物語はいかに変化したのか指摘した。F. ファノンの『黒い皮膚・白い仮面』の中で糾弾された、M. カペシアの『わたしはマルチニック女』を適宜参照し、『移り住む心たち』において自らの血統を白くしたいという乳白化願望がいかに描かれているのかについて分析した。また、ハイブリッドが、カリブ海の場合、女性の性被害を犠牲にして生じたことを述べた。そして、肌の色や男性との関係によって人生が決まってしまうような女性の運命からの解放を願ってこの作品を書かれたのではないかという作者の願いを明らかにした。